

Glocal Tenri

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.27 No.4 April 2026

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University



4

CONTENTS

・巻頭言

「元初まりの話」の読まれ方

／井上 昭洋 1

・文脈で読む「身上さとし」(24)

明治 23 年 4 月・5 月

／深谷 耕治 2

・英語文献にみる天理教 (15)

『Japan To-Day (現時の日本)』(2)

／尾上 貴行 3

・天理図書館外史 (3)

教科書が掲載する資料

／三濱 靖和 4

・音のちから—中国古代の人と音楽 (31)

物語からみえる音の世界—外来音楽との勝負—

／中 純子 5

・ブラジルの宗教的風景 (11)

アンテベラム期の米国系プロテスタント教会による布教活動⑤

／中西 光一 6

・2025 年度公開教学講座：「元の理」の

学術的研究とその新しい展開を求めて (10)

第 10 講：「元の理」の人間学／人類学

／井上 昭洋 7

・おやさと研究所ニュース 8

2025 年度おやさと研究所 特別講座

「教学と現代」のご案内

巻頭言

「元初まりの話」の読まれ方

おやさと研究所長 井上昭洋 Akihiro Inoue

益田勝実は、『火山列島の思想』に収められた「幻視—原始的想像力のゆくえ」において、「元初まりの話」を「原始の創世神話の一面を失いながら、それに新たな一面を添えて、教祖の中に蘇った、この世のはじまりの話」として捉えた⁽¹⁾。彼によれば、「元初まりの話」は『古事記』のように神名の列挙によって天地創造の神秘を語るわけではない。しかしそこには、「驚くべき人間の<生>の苦悩の体験と、それを通り抜けてきて獲得できた、天地自然みな人間に应じてある、という底抜けの楽天主義」が表現されているという。益田はそこに、『古事記』の創世神話が内包していたはずの「原始日本の神話のエネルギー」を認めたのだった。

益田は『ムック天理Ⅱ：心のまほろば—心の本 人間誕生』にも論考を寄せている⁽²⁾。神話研究の鉄則として、私たちは神話の誕生に立ち会うことができないとされる。神話には編纂者はいても、その原作者を知るべきがない。しかし、彼は「元初まりの話(泥海古記)」に接して、「ほんとうの神話が、しかも従来のどの伝承とも全く別のたぐいまれな思想を湛えた新しい神話が、創造されている！」と驚愕する。さらに、それは「記紀神話の模倣などではなく、その発想と主題において全く異なり、物語の展開と表現においても類のない壮大な神話ではないかと問いかける。

古代日本の神話を研究する益田は、神祭りのなかでの忌み籠もりの期間に、「研ぎ澄まされた心で神になっていく人」が神話を生み出すという仮説を立てていた。そうであれば、「元初まりの話」を初めて知った時の彼の驚きもうなずける。そして彼は以下のように述べる。

天理教祖の最晩年、最も高い心の境地、親神そのものになりきられている境地で、人間とはそもそもなにか、その誕生のプロセスでどのような不屈な努力

がなされたか、それがどのような親神の配慮と助けによるものであったか、存在論の根源をみずから問い進め、神意によって答えようとされつつ、それをやめられなかったことを知り、わたしは深く心うたれるとともに、多年の研究上の疑問が氷解した思いがした。神話は太古の遺物なのだろうか。その人をえて、われわれの時代にも創造しつづけられるものではなからうか。

彼は、教祖の苦難の布教体験が「元初まりの話」に投影されているというその考察を「近代の心のさかしら」と自ら戒めつつも、それが「許されない考察ではあるまい」と述べる。そして「元初まりの話」を「神の物語でありつつ、われわれの時代の直前を生きぬいた人が、そこに籠められた思想をからだで実証しながら物語ってくれたもの」と論を閉じる。

益田は、「元初まりの話」を原始的想像力のエネルギーが『古事記』とは異なるルートを辿り、教祖を通して表出したものと捉える。信仰者が自明のものとして受け取る「元初まりの話」を神話という広い文脈に位置づける彼の考察は示唆に富んでおり、深く首肯せざるを得ない。しかし、たとえ「神になっていく人」であったとしても教祖を一人の人間と見なす視点を、天理教学と相容れないと感じる者もいるだろう。だが、その一点をもって、彼の論考を拒絶するのであれば、それは信仰的な確信というよりも知的な回避であり、一種の「心のさかしら」ではなからうか。

[註]

(1) 益田勝実 (2015) 「幻視—原始的想像力のゆくえ」『火山列島の思想』講談社学術文庫、26～62頁。

(2) 益田勝実 (1978) 「根源を問い、根源を答える—天理教祖の神話創造—」『ムック天理Ⅱ：心のまほろば—心の本 人間誕生』天理教道友社、173～176頁。

増野正兵衛一家は、明治 23 年 1 月からおぢばに伏せ込むようになった。その後の「おさしづ」を見ていく。

- ・明治 23 年 4 月 7 日：増野正兵衛身上障り又いと下りものに付伺
- ・4 月 15 日：増野松輔国許より帰国致させるよう申し来り、今は身の修行中に付、その由申送りし処、又申来りしに付、一度帰しました方宜しきや、又その由今一度申送る方宜しきや願
- ・4 月 16 日：増野正兵衛小人道興目かい乳を上げるに付伺
- ・4 月 21 日：増野正兵衛左の眉毛の上一寸出物の障りに付伺
- ・4 月 24 日：増野正兵衛三日前より腹張り時々痛むに付願
- ・5 月 1 日：春野ゆう神戸へ帰宅し、五日目より俄に寒気立ち発熱し、食事進まず、足の運び悪しく、一時は気が狂いうわ言言い、一時難しいように思いしが、追々御利益蒙りたれど、今に自由出来ず、御救け下さるよう願/同日、増野いと神戸にて居所障りに付願/同日、増野正兵衛母又いととの障りに付、神戸へ行き来て論しまして宜しきや、他人を以て論しの事を願いました方宜しきや伺
- ・5 月 10 日：増野正兵衛小人道興五六日前より目かい目の上眉毛の処へくさ一面に出来しに付願/同日、押して父とお聞かせ蒙り、これは正兵衛の父でありますか、いとどの父でありますか願/同時、増野正兵衛、いと、道興の三名の本籍を当地へ引く事の御許し願
- ・5 月 17 日：増野いと居所又正兵衛居所障りに付願
- ・5 月 26 日：春野ゆう前おさしづを頂き、清水与之助より御話伝え下されしも、未だ速かおたすけ蒙り申さず、よってたんのうの事情、いかなる理も悟りますに付、おたすけの願/同日、増野正兵衛腰の障りに付願/同日、神戸の野本、松田外二軒出火に付見舞及母の障りに付増野正兵衛神戸へ出張御許し願

明治 23 年 4 月 7 日、正兵衛の「身上障り」と妻いとどの「下りもの」について伺うと、

「多く事情忙しく成る」と正兵衛たちの忙しい日々につれつつ、「思うたどて成らんのも理、成らんとするたどて成るも理」と天然自然の理について説かれている。

15 日、職人の修行中の増野松輔（姉まちの長男）に帰国の申し出が再三あることへの対応を伺うと、「強ってと言えぱ一つ一度戻してよかろう」と許されている。

16 日、長男道興の「目かい」「乳を上げる」について伺うと、「小人一つの事情、内々の事情」と子供の身上は家族の事情であることを伝えられ、「身の処あた糸一つの理思わん。この事情聞き難くい」とかしもの・かりもの理の治め方を示唆した上で、「三人寄れば三人の心、四人寄れば四人心。一人が一人の理を以て案じる。案じる事は要らん」と、家内一人ひとりに安心を与えることを論されている。

21 日、正兵衛の「左の眉毛の上一寸出物の障りに付」伺うと、「あちらこちらに気を兼ねて走り歩き、皆談示一つの理」と、周りと談じ合うことを論されている。

24 日、正兵衛が「三日前より腹張り時々痛むに付」願うと、「どれだけ仮普請、何処から何処までも仮普請」と建築予定の本部の煮炊場があくまで仮普請であることについてふれられて、「だん〜談じて一つの心治めるなら、めん〜のものとは思われまい」と、みんなが我が事と思えるように談じ合いを重ねることを説かれている。

5 月 1 日、春野ゆう（妻いとどの母）が「神戸へ帰宅し、五日目

より俄に寒気立ち発熱し、食事進まず、足の運び悪しく、一時は気が狂いうわ言」まで言ったので、「一時難しいように思」ったが、「追々御利益〔御守護〕蒙りたれど、今に自由出来ず、御救け下さるよう」と願うと、「古き心が掛かる」と論された。また同日いとどの「居所障り」について願うと、「離すに離されん、余儀無き心ではどうもならん」と、何かに喜ばず「仕方ない」と思う心について論されている。そこで、正兵衛は「神戸へ行き来て論しまして宜しきや、他人を以て論しの事を願いました方宜しきや」と伺うと、「ちゃんと筆に記し、他人から一人の事情を論する方がよい」と、正兵衛自身はおぢばに留まって、他の人から伝えるよう論された。

10 日、道興が「五六日前より目かい目の上眉毛の処へくさ一面に出来しに付」願うと、「小人罪無き〜〜思え」「一箇月前知らせ置いたる、父一つの心をつつ小人という」と論され、また「ほこりいんねんだん〜の理を論す」とも伝えられている。そこで、押して「父とお聞かせ蒙り、これは正兵衛の父でありますか、いとどの父でありますか」と願うと、「さあ〜今の親一つの父、前々の父、今の父、前々一つ心得違わんよう實際知らず」と論されている。「今の親」とあるので「父」とは正兵衛自身を指すと思われる。

17 日、正兵衛といとの「居所障り」に付いて願うと「今度の住家一つ不都合、なれど又々年限の理を以て広くに治まる」と、住みにくいところでも年限を重ねるうちに治まってくることを伝えられている。

26 日、ゆうの身上の障りに関して、1 日の「おさしづ」に基づいて清水与之助から話を伝えたが、すっきり回復するには至らず「よってたんのうの事情、いかなる理も悟りますに付」願うと、「一時一つ立ち帰り、心にしっかりどちらなりと心に治めてやるがよい。めん〜こう堅くろしい事情出さぬよう。いんねんだけ通る」と論されている。同日、正兵衛の「腰の障り」について願うと、「通りたるいんねんの事情、通りたる事情は分かる。こういう事見ぬ、聞かぬよう。案じる中案じる中理が増して来る。いかなる理案じんよう」と、自身のいんねんが出そうなことは「見ぬ、聞かぬよう」と論され、案じ心を持たないように再三伝えられている。

○乳（乳戻す）

『身上さとし』では、4 月 16 日の「おさしづ」について「子供の身上のお手入れの理由は、どうしてかと思うであろうが、それは、身上かしのもの・かりもの理を思わないからで、この事情はなかなか聞きとりにくいという意味で、乳をあげるのは、身上かしのもの・かりもの理を十分に治めよということを示されたのであろう」と述べられている⁽¹⁾。増野家の当時の文脈でいえば、「かしのもの・かりもの理」は自分だけが治めるものではなく、案じ心を持たないように家族一人ひとりが得心することが大切だと分かる。

○腰

また、5 月 26 日の「おさしづ」については「案じていると案じの理が増して来るから、どんな理も案じんようにせよ。という意味で、腰の障りは、先案じをするなということを示されたのであろう」と述べられている⁽²⁾。当時の文脈でいえば、義母も身上の障りを頂いており、信頼できる清水与之助が論しても、なお全快しない状況であった。また、正兵衛自身は妻とともに、住家に対して「一つ不都合」を持っていたことも窺える。正兵衛たちには、胸中いろいろと治まらないことがあったのであろう。

【註】

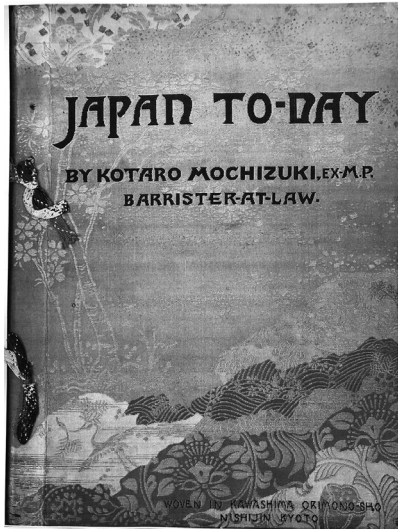
(1) 深谷忠政『教理研究身上さとし—おさしづを中心として』天理教道友社、1962 年、264 頁。

(2) 同書、200 頁。

『Japan To-Day (現時の日本)』 (2)

おやさと研究所准教授
尾上 貴行 Takayuki Onoue

前回 (2月号) に引き続き、望月小太郎の『Japan To-Day (現時の日本)』について見ていく。「序文」によれば、この書籍は特別装丁版と通常装丁版の2種類で出版されている。特別装丁版は、当時日本が条約を提携していた20カ国以上の国々の天皇、国王、大統領や海外駐在の日本大使、公使、総領事館などに贈呈された。左の写真は、天理図書館に所蔵されている『Japan To-Day』の表紙である。両版とも表紙は、当時日本を代表する織芸家川島甚兵衛によってデザインされた。特別装丁の表紙には、金糸と銀糸を巧みに織り込んだ絹織物である「綴錦」と呼ばれる高度な技術を駆使した装飾が施され、武士道や日本人の精神の象徴として桜の花が描かれた。通常装丁の表紙は、金銀の文様をあしらったサテン生地で作られ、「忠度波」と呼ばれた波の表面に桜の花の文様が描かれた。この文様の名称は武士であり詩人であった平忠度が自身の「色紙」にこの文様を用いていたことに由来し、その曲線配置の優美さから非常に高く評価されていた。望月は、これらの表紙には川島が日本人独特の芸術的思想を表現しようと尽力した苦勞の結晶を見ることができるとし、こうした点からもこの書籍は世界の人々に推薦するに値すると述べ、「序文」を締めくくっている。



つぎに、『Japan To-Day』の内容について概観しておきたい。日本という国をできるだけ詳しく正確に伝えたいという望月の強い思いを反映しているためか、同書は日本の現状を紹介するだけでなく、2500年の昔にさかのぼって日本文明の歴史を記し、そのうえで国土、政治、経済、社会、文化などあらゆる分野についての概説を試みている。同書の最初には天皇、皇后、イギリス国王、女王などの肖像画が数ページにわたって掲載されており、「Supplementary Chapters」(補章)や広告ページなどを含めると全部で1,000頁を超える大著となっている。参考までに本編の主な見出しを挙げておく(原文は英語。以下の日本語は筆者翻訳)。

第1章 (3～68頁) 「日本文明史概説」、「日本とイギリスの外交・通商史の概要」、「日英博覧会以前の日本と外国の博覧会」、「英日博覧会協会」など

第2章 (69～104頁) 「日本とその自然美」

第3章 (105～317頁) 「日本の政治組織と国民生活」、「大日本帝国の教育事業」、「内務省と地方自治」、「日本の司法制度の歴史」、「帝国議会と政党」など

第4章 (318～770頁) 「日本の産業経済活動」、「俳優と女優」、「寺院と神社」、「大日本帝国とその勢力圏」など
結論 (771～772頁)

第4章の見出しの一つ「Temples and Shrines」(寺院と神社)では、高野山金剛峯寺、成田不動明王、川崎大師、本門寺、高尾山薬王院、総持寺、善光寺、天理教、豊川^{だきにしんてん}吒呬尼真天、江ノ島神社が取りあげられている。しかし、当時の日本の宗教事情については、本編のこの項ではなく補章に詳しく紹介されている。望月はこの事情について補章の「序文」で、日英博覧会というまたとない機会をとらえ、日本の歴史、政治、経済、社会、文化などを外国人へ詳述する目的で『Japan To-Day』を出版したが、時間的な制約などを鑑みて、日本の宗教、美術、文学、音楽、女性の地位と発展、武士道については、補章として別に発行することになったと述べている。

この補章にある「Religions in Japan」(日本の宗教)では、まず当時の日本には神道、仏教、キリスト教の3つの宗教があり、さらにそれぞれがいくつかの宗派や教派に分かれていると記されている。そして、日本には国教と呼ばれるものはなく、国民の信仰の自由が憲法によって保障され、人々はいかなる宗教をも信仰することができるのであると続く。日本の主要宗教の一つとして儒教を挙げる学者もいるが、望月はこれをヨーロッパにおけるプラトン主義やカント主義のような哲学体系の一つとしてとらえ、『Japan To-Day』では日本の宗教として取り上げていない。一方、神道には聖典が存在せず神概念が他の宗教と大きく異なることから、神道を宗教と見なさないという考えもあるが、神道は祖先崇拜を基盤とし、信仰と礼拝という宗教の本質的な性質を備えていることから、宗教と見なすことは不適切ではないと述べている。とくに、仏教やキリスト教が異国から伝来したものであるのに対し、神道は日本固有のものであり、日本の宗教を語るうえで欠かせないものであると望月は主張している。

つぎに、望月は土着の宗教と外来の宗教の衝突という問題について言及している。人類の歴史において、またいかなる国や地域においても、そのような衝突は避けられないものであり、ローマにおけるキリスト教の歴史、また日本においても仏教とキリスト教が伝来した際に同様のことが起こったと指摘している。しかし、日本の既存宗教は新しい宗教に対して排他的ではなかったとし、たとえ一時的に排他的であったとしても、最終的には包容力を発揮してきたと説明する。現代の日本において、神道の神棚と仏教の仏壇が並んでいる家庭が見られるのであり、またキリスト教と他宗教には神道と仏教ほどの調和は見られないとしても、少なくとも受け入れる姿勢は見られるのであると述べている。そして、日本の三大宗教として神道、仏教、キリスト教を挙げ、各宗派や教派ともども、それぞれの信仰を通じて国家の基盤を築くために協力し、国家への忠誠心と愛国心を育んでいると説明している。

補章にある「Religions in Japan」(日本の宗教)では、このようにまず日本の宗教の概要を説明した後、神道、仏教、そしてキリスト教についてそれぞれさらに詳細な解説を行っている。そして、神道の教派として、神道大教、扶桑教、御嶽教、黒住教、神道大成教、禊教、神道修成派、実行教、金光教、出雲大社教、神習教が挙げられ、最後に天理教の名前が記されている。

本館所蔵資料は、閲覧への提供や展覧会での展示以外に、出版物やテレビ番組等での図版利用がある。図版利用の申請が最も多いのは、森川許六が描いた松尾芭蕉の『奥の細道行脚之図』(元



禄6(1693)年画(左図)である。同図が天理図書館の所蔵品と知っている人は必ずしも多くないかもしれないが、国語や歴史の教科書や学習用教材に載っており、多くの人が一度は目にしたことがあるだろう。

なぜ教科書が同図を掲載するのだろうか。現存する芭蕉像のほとんどが芭蕉の没後に描かれたものであるのに対して、この『行脚之図』は、芭蕉生前中に描かれたものである。また、画者の許六は、芭蕉の弟子であり、蕉門十哲の一人に数えられる。とりわけ、画才については『許六離別詞』の中で「画はとって予が師とし、風雅はをしえて予が弟子となす」と芭蕉が高く評価している。元禄6年当時、芭蕉は『奥の細道』を執筆中であり、翌年に没した。

『奥の細道行脚之図』に次いで図版掲載利用の申請が多い資料の一つが、フォペルの地球儀(下図)である。意外に思うかもしれない。松尾芭蕉は、日本人であれば知らない人はいないような人物であるのに対して、フォペルを知っている人はどれほどいるだろうか。それにも関わらず、教科書にも掲載されることがある。



地球儀(直径28cm、高さ34.5cm)

カスパー・フォペル(Caspar Vopel)は、ケルン近郊の小さな町メデバッハで生まれ、ケルン大学で数学を修めた後、数学教師をしながら、地図や地球儀・天球儀等を製作し、その分野でも知られていた。本館所蔵フォペルの地球儀のインスクリプション(銘文)を転記すると、“CASPAR. VO/PELLEVS. MEDEBACH/GÆOGRAPHICAM SPHÆ/ RAM HANC FACIEBAT/ COLONIÆ A. 1536”(「/」は改行位置)とある。「メデバッハ出

身のカスパー・フォペルがこの地球儀をケルンで1536年に製作した」と読める。フォペル製作のものとしては現存最古の地球儀である。

中空の紙製の球に木版で地図を印刷した12枚の舟底型紙片(ゴア)を貼り合わせたもので、真鍮製の子午環の両端に留め金で固着された軸の周りを回転する構造になっている。動物の脚の形をした三脚台のようになっており、三脚台から伸びる女性の半身像を彫刻した真鍮製の三本の支柱が幅1.9cmの地平環を支えている。

北アメリカとアジアをつながつた一つの大陸として描いており、日本を現在の西インド諸島に浮かぶイスパニョーラ島に“Zipanga”と記すなど、コロンブスの頃の世界観を留めている。

この地球儀を教科書が掲載するのは、日本史におけるキリスト教伝来と南蛮貿易のくだりである。1549年にフランシスコ・ザビエルが来日して以後、キリスト教宣教師によって南蛮の品々が日本へ持ち込まれる。地球儀もその一つである。ザビエルの来日

と製作年代に近いフォペルの地球儀を舶来した品の一つとして掲載することができる。

ところで、各地の大名は貿易の利益を得るためにキリスト教を保護し、領内での活動を許可した。織田信長もその一人で、地球儀も所持していた。ポルトガル人宣教師ルイス・フロイスは『日本史』の中で、信長が宣教師の話に感服する様を以下のように描写している。

ある時、信長はわざわざ我らの掟の話聞き、それについて議論し、かねて抱いていた疑問を質そうとオルガンティーノ師とロレンソ修道士を多くの武将の前に呼び、外にいる者も聞けるように彼らがいた広間の戸を開けさせた。彼は以前に見たことがある地球儀を再びそこへ持ってこさせ、それについて多くの質問をし反論した。最後に、司祭と修道士が一同の前で答えたことに常に満足の意を表し、伴天連たちの知識が仏僧らのそれと大いに異なっていると述べた。(中略)終りに信長は、司祭がヨーロッパから日本に来るのに、どのような旅をしたかを地球儀によって示すことを希望した。彼はそれを見聞した後、手をたたいて感心し、驚嘆の色を見せ、かくも不安全で危険に満ちた旅をあえてするからには、彼らは偉大な勇氣と強固な心の持主に相違ないと言い、司祭と修道士に向かい、笑いながら、貴公らはかくも危険を冒し、遠く長い海を渡って来たからには、その説くことは重大事に違いない、と語った。

信長が見ていた地球儀について具体的な記述はないが、地球儀が重要な役割を果たしていることがうかがえる。

以上、教科書への利用など、図版掲載の多い資料について述べてきたが、本館は地球儀の他に1544年製のフォペルの渾天儀(armillary sphere)も所蔵している(右図)。渾天儀とは、天球のモデルであると同時に天体の観測装置として使われた器械で、水平線、子午線、天の赤道、黄道、白道などを表す多数の環などで構成し、製作者や時代によってさまざまなものがある。



渾天儀(直径12.7cm、高さ19.5cm)

館蔵フォペルの渾天儀については、本館所蔵の他の古地球儀・天球儀とともに他日稿を改めて紹介できればと思う。

[註]

- (1) 令和7年度版中学校用教科書『新編新しい国語3』(東京書籍)他に掲載がある。
- (2) 松尾芭蕉の門人の内、特に優れた10人。
- (3) 令和7年度版中学校用歴史教科書『新しい日本の歴史』(育鵬社)には、『奥の細道行脚之図』とフォペルの地球儀の両方の掲載がある。
- (4) 松田毅一・川崎桃太訳『フロイス日本史』第5巻、中央公論社(1978年)、29～30頁。
- (5) 日本天文学会編『天文学事典』<https://astro-dic.jp/>(2026年3月3日閲覧)。

[参考文献]

- 牛見正和「奥の細道行脚之図」『陽気』、2007年10月号。
天理図書館編「地球儀・天球儀I」『善本写真集二十』(1963年、天理大学出版部)。
神崎順一「フォペル地球儀」『陽気』、2007年5月号。

物語からみえる音の世界—外来音楽との勝負—

実際の曲調や奏法がどうだったのか知る術のない古代や中世の音楽へのアプローチとして、関連する物語から、そのありかたを考えていくことも許されるだろうと思う。今回は、琵琶に関する物語を紹介したい。

唐代皇帝太宗の威信をかけて

昔も今も、外国の要人をもてなすために、贅沢な食事と素晴らしい音楽が用意される。しかしながら、今日では、そこで披露された音楽が、国の威信まで左右するようなことは無さそうである。しかしながら、唐代には、以下のような話がある。

太宗の御代（貞観年間 626～649）に、唐の西方の国より一人の琵琶の名手が献上された。一曲を演奏すると、その琵琶の音は力強く鳴り響いた。太宗はいつも夷狄が中国に勝るのを苦々しく思っていた。そこで盛大な宴を開いて、羅黒黒を帳を隔てたところにひかえさせ（胡人が弾く）琵琶を聴かせた。羅黒黒はそれを一度で習い覚えた。太宗は、胡人に「この曲なら、わが宮女でも弾ける」と言って、大琵琶を取って、帳の下で、羅黒黒に奏でさせると、一音も違うことがなかった。胡人は、羅黒黒が宮女だと思ひこみ、驚いて帰っていった。この話を聞いた西方の数十カ国は、唐に降った。（太宗時、西国進一胡、善弾琵琶。作一曲、琵琶絃撥倍轟。上每不欲番人勝中国。乃置酒高会、使羅黒黒隔帷聽之。一遍而得。謂胡人曰此曲吾宮人能之、取大琵琶、遂於帷下、令黒黒弾之、不遺一字。胡人謂是宮女也、驚嘆辞去。西國聞之、降者数十国）
張鷟『朝野僉載』卷五

この話から読み取れることは、唐代初期には、西方の国々の音楽が中国のそれよりも優れていたということである。さらに、西方の国の琵琶は、絃や撥が太く大きく（強く鳴り響く）ことである。また、中国にも西方の琵琶の曲を一度聞いただけで覚えて弾ける能力をもった楽人がいるようになったことも、唐代初期の宮廷音楽のレベルが向上していたことを示す。胡人はこれが宮女だと思ひこんで驚いたとある。宮女は、音楽の専門家ではないので、その宮女でさえ弾きこなせるというのが重要だったのであろう。

四夷楽の変化

上記の物語から窺えることを、歴史書の記述と照らして考えてみたい。まず、毎回夷狄に負けていたことである。それについては隋代に遡って考える必要がある。渡辺信一郎『中国古代の楽制と国家—日本雅楽の源流』（文理閣 2013年）に次のようにいう。

「中国の先聖王が夷狄のために制作するのが四夷楽である」という漢代の四夷楽の理論は、隋唐期にあっては、逆に四夷楽によって中国の天子の音楽が支えられるという皮肉な結果をもたらした。（261頁）

漢代の四夷楽とは、経書である『周礼』春官の鞀鞀氏（ていろうし）がつかさどったとされる音楽で、「東夷は韞、南蛮は任、西戎は株離、北狄は禁」で、「王者は必ず四夷の楽を作し、天下を一とするなり」と鄭玄の注にある通りである。それが逆になっているというのは、外来音楽が技術面でも内容面でも中国のそれに勝るほど隆盛になったことを意味する。『旧唐書』巻29音楽志によれば、後魏に曹婆羅門が、龜茲の琵琶を商人から得て、世の中にそれを伝え、孫の曹妙達（みょうたつ）が北齊の高洋（文宣帝 在位 550～559）に寵愛され、高洋はつねに胡鼓を撃って曹妙達の琵琶に合わせていたという。その頃から、外来音楽が流入してきたが、北周の武帝が外国人女性を后にして、龜茲（現在のクチャ）・疏勒（カシュガル）・安国（ソグド）・康国（サマルカンド）【現在の地名の特定は、岸辺

成雄『古代シルクロードの音楽』講談社 1982年 107～109頁による】の音楽が大いに長安に集まったと、隋唐に到る過程を記している。それらは隋や唐初に外来音楽を宮廷で行う源となった。中国にはなかったさまざまな楽器や舞踏などが西方諸国から流入してきたのである。『隋書』巻15音楽志によると、隋の煬帝の大業6年（610）に、高昌（トルファン）が、「聖明楽曲」を献上することになった。煬帝はひそかに使者の宿泊所で知音に楽曲を聴かせて、練習させた。献上の段になって、先に隋側が演奏すると、胡人は驚いたという。隋の煬帝も、外国音楽になんとかして勝ちたいと思っていたことは、唐の太宗と同じであった。さて、『旧唐書』音楽志によると、唐代の四夷楽は、東は高麗楽・百濟楽の二国、南は扶南楽・天竺楽・驃国楽の三国、北は北狄楽としてまとめられているのに比して、西は高昌楽・龜茲楽・疏勒楽・安国楽・康国楽の五国と、唐代宮廷音楽に占める重要度が高いことが窺える。唐代初期には、まだ中国宮廷の音楽レベルはそれらの国に及ばなかったようである。太宗がつねに文化的に劣等意識をもっていたことは、歴史書の記述からしても頷ける。

唐代初期の琵琶のレベル

上記の康国楽以外の西方四国に共通している重要楽器のうちで着目したいのが、「琵琶」と「五絃琵琶」である。唐代中期もすぎると、白居易の「五絃弾」（809年）や「琵琶行」（816年）などの作品から、民間の楽人も高いレベルの演奏が可能であったことが推測される。しかしながら、唐代初期においては、どうだったのであろうか。それを知ることは難しいが、冒頭の物語からは、羅黒黒のように琵琶の演奏にすぐれた楽人が宮中にいたことが確認される。さらに、西域から新たな楽曲が、楽人の献上という形で入ってきていたことも注目される。こうして長安に外来の楽人が集められていった。それが唐代宮廷音楽のレベルを向上させたと考えられる。それゆえに、唐代中期には、琵琶は都の音を代表する楽器とまでなっていくのである。

唐代初期における楽譜の存在の有無

唐代中期には、演奏のための楽譜は確実に存在した（拙論「音の伝承—唐代における楽譜と楽人」『中国文学報』第62冊 2001年参照）。唐代初期においては、どうだったのか。『朝野僉載』は、張鷟（658?～722?）によってまとめられた。彼は高宗期から玄宗期、つまり唐代前半を生きた者であり、その記述は、唐代前半のことと捉えてよい。そこで、冒頭の物語のなかの「不遺一字」という表現を考えてみたい。「遺」にはさまざまな意味があるが、「尚書三篇を誦して一字も遺わず」（『魏書』巻82祖瑩伝）と経書の『尚書』を一字も間違えず暗記していたといい、宋代詩人の陸游に「丁巳正月二日雞初鳴、夢に一山寺の鳳山と名づくるに至る。其の尤も勝れる処は味軒と曰う。予、為に詩を賦す。既に覚めて一字も遺わず」（『劍南詩稿』巻35）と、夢で鳳山という名の寺で詩をつくったが、覚めてもそれを一字も違えることがなかったと題する詩がある。どれも経書や詩篇などを一字も間違えず記憶しているという意味で使用されているようだ。冒頭の物語では、音の一つも間違えずに記憶していたと解釈するのが妥当のようである。もしかしたら、唐初に献上された楽曲には歌詞が付されていて、それに合わせて音が配されていたのかもしれない。先の煬帝に献上された「聖明楽曲」と題された高昌からの献上曲には、題名に相応しい歌詞が付けられていた可能性もありそうだ。楽しい想像がどんどん膨らんでいく。たかが物語、されど物語、唐代音楽のありようを物語がいくばくか伝えてくれる。

ダニエル・パリッシュ・キダーにとって、ブラジル社会を理解するうえで看過できない要点の一つは黒人奴隷制であった。奴隷制は米国と無関係な制度ではなく、アンテベラム期にはアメリカ南部に広く浸透し、当地の政治・経済システムの重要な一部をなしていた。米国の奴隷制の実態については、周知の通り、アレクシス・ド・トクヴィルの代表作 *De la démocratie en Amérique* (1835-1840) が世界的に知られており、そこではトクヴィルが奴隷制の惨状をあからさまに喝破している。こうした祖国の状況を背景に育ったキダーの目に、ブラジルの奴隷制はどのように映ったのだろうか。

ヴァロンゴ市場と奴隷貿易

すでに本誌 2024 年 12 月号で示した通り、ブラジルの黒人奴隷制は他国と比べても規模が突出しており、16 世紀前半から 19 世紀後半にかけて 500 万人以上の奴隷が輸入された。アメリカ大陸で最も多く奴隷を輸入した国である。なお、日本ではハリウッド映画の影響もあり、黒人奴隷制といえば米国の事例を想起することが多い。しかし、実際には米国に強制連行された奴隷は約 40 万人にとどまり、ブラジルに連行された数の 1 割にも満たない。

ただし、数の多寡がその悲惨さを左右するわけではない。奴隷制が廃止されるまで、奴隷は各国の主権のもとに置かれ、人間というよりもむしろ商品 (commodity) として南北アメリカに離散させられた。彼らは暴力による物理的抹殺や同化による文化的消滅を通じ、固有の伝統文化や歴史、さらには自己のアイデンティティをも剥奪された人々であった⁽¹⁾。

こうした奴隷制に対して、キダーは相反する見解を示している。まず、否定的な記述として、1839 年当時、奴隷が多く居住していた首都リオデジャネイロの状況について次のように記している。

現在の市街地の相当部分を占めていた湿地は排水され、堤防が築かれた。街路は舗装され、街灯も整備された。それまで市街地の通りで売りに出され、嫌悪と恐怖を呼び起こす光景となっていたアフリカ人奴隷の積荷は、住民を疫病の危険にさらすこともあり、ヴァロンゴへ移されることとなった。同地は、これら不幸な人々を取引するための公的市場として指定されたのである⁽²⁾。

ここでいう「ヴァロンゴ (Valongo)」とは、現在の「ヴァロンゴ埠頭 (Cais do Valongo)」を指し、数多くのアフリカ人奴隷が到着した奴隷貿易港の跡地である。ヴァロンゴに対するキダーの記述には、「嫌悪」や「恐怖」、「不幸な人々」といった表現に見られるように、奴隷貿易の残虐性に対する批判的視線が明確に表れている。とりわけ「疫病」への言及は、貿易港の劣悪な衛生環境を想起させるものである。実際、ヴァロンゴの衛生状態は極めて劣悪で、天然痘や赤痢、黄熱病に罹患する奴隷も少なくなかった。命を落とした者は港周辺に埋葬され、その地は現在「プレトス・ノヴォス奴隷墓地 (Cemitério dos Pretos Novos)」として知られる。今日でも、同地では遺骨の収集・保存作業が続けられている。

奴隷の社会的役割

こうしたマージナルな扱いを受ける奴隷の状況だけでなく、現地で奴隷がさまざまな役割を担ってきた事実についても、キダーは綿密に記録している。そこからは、彼らがいかにブラジルの社会・経済と不可分に結びついていたかが見て取れる。キダーは次のよ

うに記している。

生活必需品であれ嗜好品であれ、望まれるものはほとんど何でも供給されているこの豊富さを前にすれば、誰も不満を抱くには及ばないであろう。これらの商品は市場に豊富に並んでいるだけでなく、町や郊外を行き交う奴隷や自由黒人が売り歩いている。彼らは通常、それらを籠に入れて頭上に載せて運ぶ。ほとんどあらゆる種類の商品が、同様の方法で売られている。(…) 購入を望む者は、低く抑えた口笛で彼らを呼び止めさせればよい⁽³⁾。

こうした売り物を頭上に載せて売り歩く奴隷は「都市奴隷 (urban slaves)」と呼ばれ、リオデジャネイロをはじめ、サンパウロやサルヴァドールにも多数存在した。キダーは、こうした奴隷をめぐる社会的文脈のなかで、彼らを単なる改宗対象としてではなく、地域社会の商業活動を支える重要な担い手として捉えている。一方、自然科学の領域においても、キダーは奴隷の潜在的な可能性に注目している。とりわけ、外国人の自然学者と関わる奴隷を「自然学者の黒人 (negroes of a naturalist)⁽⁴⁾」と称し、次のように記している。

多くの奴隷は幼少期から昆虫学や植物学の標本の収集・保存を行うよう訓練され、それを継続的な仕事として担うことで、膨大な標本を蓄積している。こうして蓄積された標本は、アマチュア⁽⁵⁾の自然学者にとって格好の場となっている。もし彼らがその職分に特有の情熱を備えているならば、(…) フォン・シュピックスやフォン・マルティウスと同様に、そこからなお多くの興味深い自然史資料を見出すことができるであろう⁽⁵⁾。

ここでいうシュピックスとマルティウスとは、それぞれヨハン・バプチスト・フォン・シュピックス (Johann Baptist von Spix) とカール・フリードリヒ・フィリップ・フォン・マルティウス (Carl Friedrich Philipp von Martius) を指している。両者は 1817 年から 1820 年にかけて自然科学調査のためにブラジルに滞在したドイツ人博物学者であり、その成果は *Reise in Brasilien* (1823-1831) として刊行された。同書は、ブラジルの自然史 (動植物) をはじめ、地理や民族誌、社会状況を総合的に記述した著作として、当時のヨーロッパ学術界で高い評価を受けている。

キダーは、こうした自然学者を支える奴隷の存在に注目し、ブラジルにおける自然史研究においても奴隷が重要な役割を担い得ることを指摘している。しかし、彼は奴隷制の惨状や奴隷の特殊な役割に限定して観察を閉じるのではない。それらをプロテスタント布教とどのように結びつけられるかを探ろうとする。こうした、黒人奴隷を宣教の対象とする戦略や学校設立に関するキダーの奴隷制への見解は、次回で詳しく見ていくことにする。

[註]

(1) 暴力や同化によって固有の伝統文化や歴史、さらには自己のアイデンティティを奪われたアメリカ大陸の黒人奴隷とその子孫は、アフリカン・ディアスポラ (African diaspora) とも呼ばれる。

(2) Daniel Parish Kidder. *Sketches of Residence and Travels in Brazil: Embracing Historical and Geographical Notices of the Empire and its Several Provinces*. Vol. 1. London: Wiley & Putnam, 1845, p. 41.

(3) Ibid., pp. 97-98.

(4) Ibid., p. 129.

(5) Ibid., pp. 129-130.

第10講:「元の理」の人間学／人類学

おやさと研究所長
井上 昭洋 Akihiro Inoue

神話とは

「元初まりの話」は『天理教教典』の「第三章 元の理」に収められた創世説話であり、「おふでさき」と「こふき本」に基づいて編纂された人間と世界の創造についての物語である。「元の理」は天理教の教理的原理を意味するが、創世説話である「元初まりの話」そのものを指して用いられることも多い。天理教学では一般に、これを創世神話ではなく創世説話として捉えることが強調される。しかし発表では、人間と世界の起源を語る物語という内容的特徴と、口伝の起源を持ち教祖承認の決定版が存在しないという伝承形態から、神話の性格を帯びたテキストとして扱う。

神話とは世界の起源や人間存在の根拠についての口承伝承であり、世代を超えて伝えられた集合知、共同体の記憶である。神話は現実を説明し解釈するためのフォーマットを提供し、それを真実として受け入れる人々にとって現実解釈の枠組みとなる。レヴィ＝ストロースによれば、神話的説明には二つの性質がある。一つは「時間的統合機能」であり、過去によって現在を説明し現在によって未来を説明して、ある秩序が永久に続くことを確認するものである。もう一つは「複数コードまたは多重コードの使用」であり、宇宙のさまざまな次元において事物がなぜ現在の姿であるかを一つの筋で説明すると同時に、異なる次元間の類似や照応をも説明するものである。

神話は「二項対立」「変換」「媒介」という三つの方法で物事を説明する。二項対立とは相互に規定し合う対立項目の関係のことであり、神話は「自然」と「文化」、「生」と「死」、「男性」と「女性」などの対立を並べて意味体系を構築する。変換は要素を入れ替えても構造(根本的な枠組み)が保たれるような入れ替え操作のことであり、神話には不変の構造があることを神話群(神話の集合体)の中での神話の変換を通して示す。媒介は対立する項目を近づけたり第三の項目を導入したりすることで二項対立の問題を物語の中で解決する。

テキストとしての「元初まりの話」

「元初まりの話」は、世界のあり方の根拠(元の理)を示し、人間の生きていくモデル(陽気ぐらし)を提供する口承形式の話(こふき)であり、始原の時(元初まり)が語られ、儀礼(かぐらづとめ)との間に補完関係がある。これらの点で神話の定義を満たしている。また、時間的統合機能や多重コードの使用といった神話の性質も備えている。原作者が教祖として存在する点で神話ではなく説話といえるが、この一点を除けばほぼすべての神話の定義や特徴が当てはまる。さらに、「元初まりの話」の元となった「こふき本」が教祖の承認を得られなかったことを考えると、オーソライズされたオリジナルのテキストが存在しないという意味で神話的なテキストともいえる。

「元初まりの話」は三幕からなる。第1幕は雛型と道具の確定、第2幕は三度の宿し込みと三度の出直し、第3幕はめざる一匹以降の人間の成長を描く。前半(第1幕・第2幕)は月日親神による人間創造を、後半(第3幕)は神が退いた後の人間の成長を物語る。「おふでさき」では第1幕について詳しく述べるが、

第2幕は概略のみで第3幕には全く触れておらず、かぐらづとめも主に第1幕を表象している。

「元初まりの話」を構造主義人類学で読み解く

本論では「元初まりの話」を素直に読むときに生じる二つの疑問を、構造主義的視点から読み解く。第一の疑問は、月日親神は一柱なのか月様と日様の二柱なのかという問題である。この問題は「二つ一つ」という教理によって解消されるが、『天理教教典』の「元初まりの話」においては^{ほころ}綻んだままである。教典版の創世説話の第1幕では、別席台本の説話にある「御相談の上」という文言が省かれており、月日親神は相談できる相手のいない単一の神として表記される。「こふき本」に記される月日兩人から月日親神という単数の主語への変更は、一神教としての天理教を明示するためのサニタイズ(無菌化)であったと考えることができるのではないだろうか。

しかし第2幕の人間創造の場面では、月様がいざなぎのみことの体内に、日様がいざなみのみことの体内に入り込むと述べられている。ここでは月日親神を別個に描写せざるを得ず、第1幕における一神教的表現との整合性が取れない。「こふき本」の創世説話を構造的に読めば、月様と日様という対立する二つの原理が、いざなぎのみことといざなみのみことという交わる両神を媒介項として統合され、人間が創造されるという古典的な神話的論理が認められる。一方、『天理教教典』の「元初まりの話」においては、深層における月様・日様の対立と相補の構造が、表層の一神的表記によって完全に解消されず、人間創造の場面で不可避的に露呈してしまったと解釈できる。

第二の疑問は、第2幕から第3幕への唐突な飛躍についてである。いざなみのみことが身を隠した後、人間が残らず出直し、その後、虫、鳥、畜類と八千八度の生まれ変わりを経てめざるが一匹残ったと続く物語の流れに、誰もが断絶・飛躍を感じるだろう。しかし、この説話の神話素を抽出し「生」と「死」を対立軸として分析すると、各幕の特徴が見えてくる。第1幕は「生」の条件としての「死」、および「生」の準備を語る。親神が水棲動物を引き寄せ、貰い受けて食べることは動物にとっての「死」であり、それぞれに道具としての役割と神名を与えるのは「生」の準備である。第2幕は「生」と「死」の循環を語る。そこに流れるのは、宿し込みと出直しが三度に留まらず、四寸から五尺になるまで象徴的には無限に繰り返されるような循環する時間といえる。一方、第3幕では成長が約束された「生」のみが語られ「死」は出てこない。そこでは天地が段階的に形成されるのに必要とされる直線的な歴史的時間が流れている。このように考えると、第2幕と第3幕の断絶は、始原の時に始まる神話的時間と人間の歴史的時間の間の裂け目として理解することもできる。

構造主義的分析は、物語の単なる読解や教理的解釈だけでは説明しきれない神話の綻びや亀裂、緊張を、対立項の配置という観点から照らし出すことを可能にする。このようなアプローチは、教理的・信仰的な解釈をより豊かにするものであり、「元の理」の人間学の構築に向けて必要とされる作業である。

2025年度

天理大学おやさと研究所特別講座 「**教学と現代**」

「**元の理**」の学際的研究の可能性

【演題】「元の理」の生物学的意義と進化論史的評価

【講師】佐藤 孝則 氏（まほろば両生類研究所長・元おやさと研究所員）

2026年3月25日(水)

13:00～15:30

天理大学研究棟3階 第一会議室

研究棟正面西側の自動ドアから入り、

エレベーターで3階に上がり、右側へお進みください

プログラム

- | | |
|-------------|--|
| 13:00～13:05 | 開会挨拶 井上 昭洋 所長
趣旨説明 金子 昭 研究員 |
| 13:05～13:50 | 講演 佐藤 孝則 氏
『元の理』の生物学的意義と進化論史的評価 |
| 13:50～14:00 | 休憩 |
| 14:00～15:00 | パネルディスカッション 司会 堀内 みどり 主任
総合テーマ 『元の理』の学際的研究の可能性
パネル① 澤井 治郎 研究員
「こぶきを捨えること—こぶき話と『元の理』」
パネル② 中西 光一 研究員
「進化論と人種主義—『元の理』が示すもう一つの世界観」 |
| 15:00～15:25 | 質疑応答 |
| 15:25～15:30 | 総括コメント・閉会挨拶 井上 昭洋 所長 |

お問い合わせ **天理大学おやさと研究所**

〒632-8510 奈良県天理市杣之内町1050

TEL 0743-63-9080 E-mail oyaken@sta.tenri-u.ac.jp

グローバル天理
第27巻 第4号 (通巻316号)

2026年(令和8年)4月1日発行

© Oyasato Institute for the Study of Religion
Tenri University

発行者 井上昭洋
編集発行 天理大学 おやさと研究所
〒632-8510 奈良県天理市杣之内町1050
TEL 0743-63-9080
FAX 0743-63-7255
URL <https://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/index.html>
E-mail oyaken@sta.tenri-u.ac.jp

おやさと研究所 (HP)



印刷 天理時報社

Printed in Japan